埋れ木の花咲くことも無かりしに　ー　源三位頼政
作品コンセプト

近江典彦

猿楽師世阿弥が残した作品の一つ『頼政』をベースに作曲した作品です。
長３和音に根音から増４度上を足した和音、そして長３和音に根音から完全４度上を足した和音（いわゆるsus4の和音だが解決しない）という比較的新しい概念の和音を主体に、調性のクラシック音楽ではあまり積極的に試みられなかったサブドミナント進行を前述のメインの和音を用いながら進行することで、クラシックさを残した新しい響きの音響空間、そして推進力を作ることがコンセプトの楽曲です。
ロンド形式と三部形式の複合型みたいなものですが、主題の部分が三部形式の後ろ二つの部分に置かれているのが特徴的です。
ロンド形式の主となる部分では霊となった頼政が現世に現れる様を表現し、三部形式の一部目は入り乱れる戦乱の様子を、残りの二部では頼政の最後の戦いの様子を表現し、最後は前述の和音類が無調的に配置される和音進行の中で頼政の霊が僧の弔いに感謝しながら宇治平等院の扇の芝の草陰に去っていく様を表現しています。
この作品は能舞とともに、或いは能公演の間に上演することも可能な様に作ってあります。